

「政治漫画」とユーモア

——内容分析と効果研究——

芥 木 正 治

第一章 問題の所在

第二章 実証研究

(1) 分析手順

(2) 分析結果と考察

1 ユーモアの分析

2 テーマの分析

3 記事・社説・「政治漫画」

第三章 結論

第一章 問題の所在

「政治漫画」に限らず、政治における「笑い」を考察するにあたっては「批判としての笑い」が暗黙の前提とされ
ていた。抵抗の諸形態の一つとして「笑い」がとりあげられたり、政治認識の一つ（「政治的ゴシップのレベル」⁽¹⁾）とし
て体制を批判し、かつ「安全弁」の機能をはたすものとして「笑い」が位置付けられることもあった。しかしながら、

「笑い」やユーモアの概念に関する研究は政治学では散見できない。人間にとって身近な存在であるがゆえに「笑い」やユーモアに関しての研究は体系化されていない。とはいえ、ユーモア研究は、きわめて多方面に及ぶ。⁽³⁾たとえば、「政治漫画」が用いられることの多い心理学におけるユーモア研究でも、ユーモア研究は「政治漫画」のそれ自体の研究としてではなく対人認知、学習、パーソナリティー研究などの一貫として扱われてきた。⁽⁴⁾また、コミュニケーション論における「政治漫画」の効果研究においてもユーモアや「笑い」が主要な論点となつて考察されていたとはいえない。⁽⁵⁾

しかしながら、ユーモアや「笑い」の政治的效果を無下に否定することはできない。政治認識の出発点として、⁽⁶⁾「政治的ゴシップ」のレベルを超えるものとして「自己嘲笑」による自己の立脚点の確立を「政治漫画」に求めることは無理なことではない。メディア研究から「政治漫画」研究を考えてみると、「政治漫画」の内容は送り手の意図も含めて「政治漫画」に接触した受け手の心理的・外面的行動から判断せざるを得ない。とすれば、ラスウェルのモデルのようにコミュニケーションの各要素を別個に分析することは難しい状況にある。むしろ、上記の受け手の行動への影響を「効果」とすれば、効果研究は内容研究と切り離すことはできない。「政治漫画」の「文法」⁽⁸⁾の考察は、「認識」のレベルにとどまっていたが、「情緒」的な部分の「効果」を含めた考察を行なう必要がある。

第二章 実証研究

(1) 分析手順

一九九三年八月一日より一九九四年四月三〇日までの「朝日新聞」、「毎日新聞」、「読売新聞」縮刷版（東京最終版）に掲載された「政治漫画」六三四枚を分析の対象とした。内訳は「朝日」（以下、上記のように略記）二六四枚、「毎日」

七六枚、「読売」二四枚、であった。これら六三四枚の「政治漫画」について、1内在するユーモアの分析、2テーマの分析、3文字情報（記事・社説）との関連、にわけて考察をした。

1 ユーモアの分析

「政治漫画」六三四枚すべてに対して一枚ごとに「笑い」（おかしみ）を誘うかどうかを基準にして評定者二名に評定させた。ここにおいて「笑い」を誘う「政治漫画」を選定させた。ついで、選んだ「政治漫画」二五五枚について「笑い」の根拠を問うために①攻撃性、②優越性、③不調和（性）、④意外性を表す一コマ漫画を一種類ずつ四枚見せ二五五枚の一枚ごとに最もよくあてはまるものを番号で選べた。

上述の作業の後に、「笑い」を誘う「政治漫画」について「笑い」の程度を五段階尺度を用いて評定させた。⁽²⁾「全く笑いを誘わない」ものに一点を与え、「少し笑える」に二点、「笑える」に三点、「かなり笑える」に四点をつけ、「思わず笑ってしまう」ものに五点を与えて得点化した。

2 テーマの分析

「政治漫画」が題材とする（政治的）現象や出来事を一枚ごとに読取り、各々「政治漫画」に対して一項目を原則として街頭する出来事を抜き出した。その出来事を時系列にまとめるとともに、「政治」、「外交」、「経済」、「労働」、「国際関係」、「文化」、「社会」、「スポーツ」、「その他」、に分類し各頻度を調べた。「政治」に関しては下位範疇として「政治倫理」、「内閣」、「国会」、「政党」、「政治改革」、「その他」、を設定して分類した。テーマが一項目に限定できない「政治漫画」は、その頻度が高い場合には重複したテーマの選定、その程度を評定者に評定させることを考慮した。また、1の「笑い」（ユーモア）に関する「政治漫画」についても、別個にテーマの分析を行なった。）

3 文字情報（記事・社説）との関連

九三年八月から九四年四月までの「政治漫画」について背景となる出来事にたいして当該「政治漫画」が「好意的である」、「非好意的である」、「どちらでもない」のいずれの立場をとっているのかを評定者二名に評定させた。同様にして、「政治漫画」一枚ごとに関連のある「記事」と「社説」を「朝日」、「毎日」、「読売」から抜き出してその見出しをもとに三段階尺度を用いて前述の評定者に評定させた。また、①「政治漫画」と「記事」、②「政治漫画」と「社説」、についてそれぞれ①では「政治漫画」と「記事」のうちどちらかを、②では「政治漫画」と「社説」のうちどちらかを、テーマに関するわかりやすさを基に「政治漫画」、「記事」（あるいは「社説」）、「どちらでもない」の三項目から評定者に選ばせた。

(2) 分析結果と考察

1 ユーモアの分析

(表1) から明らかのように、九三年八月から九四年四月までのあいだの「政治漫画」のうち、二五五枚が何らかの形で「笑い」を認知できた「政治漫画」であった。全体の六三四枚からみると、四〇・二パーセントにあたる。「政治漫画」が「漫」(笑い)と「画」(解説)とのふたつの機能を持つてゐることは既に明らかにした。⁽⁴⁾しかし、「画」の部分の機能への傾斜を余儀なくされていた——とくに事件の「客観」報道の影響を「記事」から大きく影響を受けてきたと考えられてきた——日本の「新聞漫画」が四割もの「漫」の機能をまだ持つてゐることは、扱われているテーマの「内容」如何でこのメディアの価値が再発見される可能性があることを示唆している。

二五五枚の内訳は、「朝日」九四枚、「毎日」六三枚、「読売」九八枚であった。自由度 $df=2$ のにおけるカイ二乗検定を行なうと、 $\chi^2_{.05} \sim \chi^2=10.2$ となって「新聞間の差はない」という帰無仮説を五パーセント水準でも棄却できない。したがって、「朝日」、「毎日」、「読売」のいずれの新聞においてもユーモア性をもつ「政治漫画」が出現する頻度はほぼ統計的には偶然の範囲内であることがわかる。（ちなみに、（表1）において上記と同様の帰無仮説をたててF検定を行なっても、危険率一パーセントで $F=10.9 > F_r=2.135$ となって帰無仮説を棄却できない。）この時期の「政治漫画」が「朝日」、「毎日」、「読売」の三紙でユーモア性の「政治漫画」が一樣であるのは、九三年七月の総選挙で自民党政権が崩壊し細川日本新党党首を内閣総理大臣にする連立内閣が発足した（5）ことと無縁ではない。「政治漫画」の構成要素のなかで重要とみなされているのは、描かれる人物のパーソナリティーである。「政治漫画」が「戯画」（カリカチュア）によってその存在を明瞭なものとするならば、「殿様」のニックネームがメディアで多用された細川首相はそのパフォーマンズと並んで「政治漫画」の格好の対象となったことはあきらかである。

新聞間のユーモア的「政治漫画」の差異は、新聞紙面に登場する枚数（度数）においてはみることができなかったが、（表2）における四つのユーモア類型と新聞とのクロス表では新聞間の有意な差をみることができる。（表2）において、（表1）と同様に「新聞間の差はない」という帰無仮説をたててF検定をおこなった。すると、自由度 $df=2, N=6$ 危険率五パーセントにおいて、 $F=5.14 < F_r=6.186$ となり帰無仮説を棄却することができない。すなわち、ユーモアの程度において新聞間の差がみられるのである。具体的には、「攻撃性」において、「朝日」は他の二紙をひきはなして高い平均値を得ている。「優越性」と「意外性」では、「毎日」が、他の二紙より高い評価を得ている。これにたいして、「読売」は四つのユーモア類型いずれにも「朝日」や「毎日」の後塵を拝していることがわかる。「攻撃性」が政治風刺の形で「政治漫画」では表現されることが多いから、「朝日」の「政治漫画」は政治風刺、権力批判といった「古典的」な「政治漫画」の流れを踏襲しているとみることができであろう。（6）「毎日」の「優越性」と「意外

性」における高い評価は、ユーモアの「質」への追求が表れていると考えられる。政治批判や政治風刺といった点では「朝日」と根を同じくしているが、直接的に政治家やその行為を批判する性格が「攻撃性」のユーモアには強いのにたいして、「優越性」や「意外性」のそれはより間接性が強い⁽⁷⁾。したがって、攻撃の「対象」への接近よりも攻撃の「技術」に関心が向けられているのがこの時期の「毎日」のユーモア的「政治漫画」の特徴であると思われる。

(表1)と(表2)からユーモアの類型に着目して考察してみよう。(表1)から「ユーモア類型の間に差はない」という帰無仮説をたてカイ二乗検定を行なったが、帰無仮説は棄却できなかった。(自由度 $df=6$, $\chi^2=11.73$ $\chi^2_{.05}=12.592$) しかしながら、「朝日」、「毎日」、「読売」と「総計」の個別にユーモア類型間の差異をみてみると、「朝日」と「総計」について帰無仮説を棄却することができた。(「総計」自由度 $df=3$, $\chi^2_{.01}=11.345$ $\chi^2=11.62$ 「朝日」自由度 $df=3$, $\chi^2_{.001}=16.268$ $\chi^2=18.766$) ここにおいて、ユーモア類型の比較は、前述の検定により三大紙全体の比較と「朝日」における類型間の比較がそれぞれ可能になった。「総計」からわかるように、ユーモアの類型の出現頻度は「攻撃性」、「優越性」と「不調和」、「意外性」との間に差がある。もともと「優越」感は「攻撃的」なジョークやウィットによくみられるものであると考えられている⁽⁸⁾。したがって残りの類型よりも「攻撃性」との近親性が高いために、比較的高い頻度を得たと考えられる。「攻撃性」のあるユーモアが多く登場したのは、前述したことにくわえて次のように説明できる。すなわち、(表2)からユーモアの程度をみると「毎日」のように「古典的」でない「政治漫画」の傾向がみられるけれども、「攻撃性」における「朝日」の特出(表2)と、(表1)の頻度における「攻撃性」の特出を考えあわせると依然としてこの時期の「政治漫画」においては体制の直接的な批判を狙った「古典」的なユーモアを笑いの源泉とした「政治漫画」が多いといえる。なお、(表2)においてユーモア類型間の差異をみるためにF検定を行なったが有意な差をみつけることはできなかった。(自由度 $u=3$, $v=6$, $F_{.05}=4.76$ $F=6.19$) 次に月別のユーモア性のある「政治漫画」の出現度数(新聞とのクロス表として)と、ユーモア類型の月別出現頻度をみてみると次のようにな

とが いえる。全体の出現度数からは、一〇月が最も多い（二七枚）。「政治漫画」総枚数に対するユーモア性「政治漫画」の割合は、やはり一〇月がこの九カ月間で最も高い五〇パーセントを示している。この「総枚数」に対するユーモア性の「政治漫画」の枚数の比率をみると、一〇月をピークに漸次減少し、三月から上昇に転じ最終月である四月には期間二番めの高い割合を示している。四月は、細川首相の突然の辞任による時期首相をめぐる政界の変動があったために道化役としての細川氏の行動がユーモア性を、とくに「攻撃性」のあるものを誘発したと考えられる。細川氏の辞意発言と現実の辞職といった「迅速」な「言行一致」が、彼のパーソナリティーだけでなく政界全体にたいする「攻撃」となって「政治漫画」に表象されたのである。（ちなみに、ユーモア的「政治漫画」の類型の月別出現度数をみても、「攻撃性」が四月において高い数値を示していることから窺い知ることができる。）では、一〇月はなぜこの期間で最もユーモア的な「政治漫画」が多く輩出されたのであろうか。ここにおいても、類型の出現頻度をみると件の一〇月は「優越性」が最も多い（一七枚）。この枚数はこの期間の最高度数でもある。これは、一〇月にエリツェン・ロシア大統領の訪日と直後の日本海への核廃棄物の不法投棄の問題、連立与党内の社会党の反対による足並みの乱れを嗤う「政治漫画」が多くみられたことによるものである。

2 テーマの分析

（表3）は「政治漫画」の面目をほどこした結果であるといえる。言い方を変えると、「政治漫画」の持つ「政治」概念の広がり（狭義の）政治（過程）、「国際政治」、「経済政策」、「外交」にいたるものであることがわかる。上位四項目で全体の九八パーセントを占めることがこのことを裏付けている。全体の総数が六三四枚にならないのは、重複がみられるからである。ところが、従来の「政治漫画」におけるテーマの重複にみられる場合にくらべて重複枚数が全体の一割にも満たない（六・三パーセント）。また、以下でのべるように、「政治」に関する「小テーマ」において

も相互に重複していた「政治漫画」は実数で一桁である。したがって、重複に関する分析は今回は見合わせることにした。さらに、テーマ別「政治漫画」全体に対するユーモア性のある「政治漫画」の割合も四一・七パーセントと1でみた「政治漫画」総数との比率の近似していることも重複が今回の「政治漫画」においてさほど重要な役割を果たしていないと判断できる理由であった。なお、各項目ごとにはカイ二乗検定により危険率〇・一パーセントにおいて有意な差が認められた。

ユーモア的「政治漫画」は(表3)の下行である。これも〇・一パーセントで有意な差が認められた。全体のテーマと同様、「政治」から上位四項目のユーモア全体の枚数に対する割合は九八パーセントを占めた。ここで特徴的なのは、「政治」項目にたいする集中がユーモア性を持つ「政治漫画」のほうが「政治漫画」一般に比べて高い(七五・八パーセント)ことである。ユーモアを感じさせる「政治漫画」が「政治過程」や「政治事情(国内)」に集中して向けられたのは、それ以外の項目はテーマそのものを読み手にまず認知させる必要があったからと考えられる。たとえば、ロシア国内の大統領と議会との対立が武力を用いるまで深刻化した九三年一〇月の「政治漫画」と社会党の党大会の模様を比べてみた場合、前者はエリツィン大統領そのもののイメージを伝えるとともに議会派の代表を「初登場」させなければならない。これに対して、後者の例では山花委員長のパフォーマンスを提示すれば足りる。一コマという限られた空間のなかで、いかに「迅速」かつ「明瞭」に描き手の意図を伝えるかが勝敗を決するとすればこの差は大きいといわざるをえない。逆にいえば、「政治」の項目は、「迅速」な伝達を行なおうとするがあまりに既存の認知構造に安易に訴えやすい。要職の退陣、白装束の切腹、内閣の閣僚の決定、土俵入り、舞台のお披露目などのようにステレオ・タイプ化しているものが多い。それゆえお手軽な「笑い」の図式に「予定調和」して事足りりとする危険も内包するのである。

次に、上位四項目について月別の出現頻度が(表4)に表されている。各項目において「国際」のユーモア性と「経

済」のユーモア性を除くすべての項目について月別に有意な差が生じた。（項目によって〇・一パーセントから五パーセントと危険率に幅がある）「政治」項目意外の項目についてみると、「国際関係」では、九月と一〇月で「国際」全体の約四割を占めている。これは、九月にはイスラエルとPLOの相互承認による中東の和平に親展がみられたことと、九月末から一〇月にかけての前述したロシア情勢の緊迫化があげられる。「経済」項目では、二月が群を抜いて多い。税制問題を「経済」項目にいたことがその原因である。「国民福祉税」の突然の導入と撤回騒動が中心となっている。直後に訪米をかねていた細川首相が「訪米土産」を所望したという「解説」をつけた「毎日」の「政治漫画」がこの騒動を端的に表している。「外交」では、二月に約三割の「政治漫画」が登場している。アメリカにおける協議が物別れに終わったことが中心となっている。ユーモア性の「政治漫画」が各テーマにどのように反映されているかをみると、上記の三項目については、ほぼ全体の枚数に比例して増加するという対応関係を示している。「経済」項目の九月は全体の枚数が多いにもかかわらずユーモア性の「政治漫画」が一枚もないという例外的な減少を示している。「経済」問題に消費税・減税・円高等の問題を含んでいることからみると、日常生活との関わりがあるにもかかわらずそれらの内容についての十全な説明がされていないという読み手の不安を代弁した結果といえる。二月の「経済」項目にあるユーモア性の度数は上記のような「健全」な対応をしているのは、「国民福祉税」の内容の簡潔さだけでなく、むしろ「国民福祉税」の内容と細川首相の提示の仕方の複合によって「攻撃性」のユーモアをもつ「政治漫画」が多く登場したと説明できる。

（表5）は、新聞別のテーマの出現度数をみたものである。新聞間の有意差は〇・一パーセント水準で有意であり、各項目間の差は〇・一パーセントから五パーセントの間で有意であるという検定結果を得た。ただし、「政治」、「国際」におけるユーモア性の「政治漫画」にはそれぞれ有意な差は認められなかった。これによると、「毎日」と「読売」の「国際」項目におけるユーモア性の「政治漫画」の出現度数の少なさが目につく。「朝日」は、「国際」だけでなく、

「経済」項目についてもユーモア性ある「政治漫画」の度数が少ない。これらは、特定の新聞の属性というよりも前述したような「国際」・「経済」における読み手のイメージの漠然性並びに現実関与の高さに起因するものと考えられる。では「読売」の「経済」、「外交」におけるユーモア性の「政治漫画」の比率の高さはどうであろうか。「読売」の当該項目のユーモア性の「政治漫画」は期間の全般にわたって偏在している。「経済」や「外交」についての読み手のイメージの違い―「朝日」や「毎日」に比べてもう少し明瞭なイメージをもつ読み手を対象にしていると推定される。

「政治」項目の下位項目についての検討をすると(表6)が得られる。これによれば、「政治漫画」全体では「内閣」に関する項目が最も多く三四・一パーセントに達した。ついで「政治改革」(二五・九パーセント)、「政党」(二八・六パーセント)となった。細川内閣の成立の持つ象徴的な意味が「政治漫画」に反映されているといえる。首相が「治漫画」に登場する機会が多いのは「政治漫画」の特徴であると言っても過言ではない。しかし、今回は自民党長期政権の終焉に関心の焦点が置かれたために、いきおい細川首相の人柄やパフォーマンスに力点が今まで以上におかれることとなった。この点は、同じ「連立内閣」である羽田内閣(九四年四月―六月)の描かれ方をみることによっていっそう明らかになると思われる。細川・羽田両氏とも自民党出身の政治家である。その政治手法は自民党内にいたところと違いはそれほどみられない。しかし、党を離れ政権を獲得してから「反自民」の面がメディアによって「重要なアジェンダ」として提示された。その後の登場順序の差が「反自民」シンボルの陳腐化にともなって細川・羽田の支持率の差となって表れたのである。

「政治」小テーマにおけるユーモア性の「政治漫画」の動向をみると、「内閣」を筆頭にして「政治漫画」全体にみられる傾向とほぼ同じである。ただし「政治改革」以下の項目に関してほぼ一様にユーモア性のある「政治漫画」が登場しているために、「政治改革」以降の項目におけるユーモア性の比率が高くなっているように思われる。

続いて小テーマの新聞による差異の有無をみると(表7)のような結果を得た。「政治漫画」全体については、

「政治倫理」、「その他」項目の新聞間の差を除き、〇・一パーセントの危険率で新聞間、各小テーマ間の有意な差は認められた。しかし、ユーモア性のある「政治漫画」については、「国会」項目における新聞間の差が五パーセント水準で、「朝日」における各小テーマ間の違いが一パーセント水準で、「毎日」、「読売」似対する各小テーマの相違が〇・一パーセント水準でそれぞれ認められただけであった。「朝日」と「読売」が「政治漫画」全体において「内閣」と「政治改革」に次いで「政党」を重視しているのに対して、「毎日」は、「政治倫理」をあげている。「政党」の内実をみる和社会党の動向や野党では自民党の情勢を批判するものが多い。両方ともに党内の足並みの乱れ（党大会での委員長選出のゴタゴタ、細川首相辞任後の渡辺美智雄氏の離党騒ぎ、首班指名や政治改革法案における「党議違反」造反」者の問題、など）を指摘している。これに対して、「毎日」は、野党としての自民党の動きを中心に描き出している。

「政党」の扱いと並んで、「国会」の運営や状況についての描写が「毎日」は他の二紙にくらべて出現の度数がきわめて低い（「朝日」一〇・九パーセント、「読売」一三パーセント、「毎日」五・二パーセント）。椿テレビ朝日元報道局長発言の証人喚問についてみると、「朝日」・「読売」は、国会の審議の停滞に注目していたのに対して「毎日」では一回しか登場させていない。政治改革や予算案審議においても審議の遅滞そのものに言及して「円滑な国会運営」をシンボルとして掲げて「政治漫画」を紙面に登場させているとみることができる。

（表6）から続いてユーモア性のある「政治漫画」についての比較を試みよう。ここにおいても「毎日」の特徴が際立っている。「朝日」や「読売」が全体の「政治漫画」の枚数にたいするユーモア性の「政治漫画」の比率が四〇パーセント程度（「読売」は三〇パーセント台）であるのに対して、「毎日」の比率は八七・九パーセントにも及ぶ。「政治改革」、「政党」については、一〇〇パーセントである。「毎日」の「内閣」についてみると、八月に四枚、一二月に三枚、三月に四枚、四月に六枚、（その他は省略）となっている。政権発足時と崩壊時（八、四月）、そして一二月はコメの自由化における過程、三月は内閣改造と統一会派構想の提示とその挫折、をそれぞれ背景とした「政治漫画」に

ユーモア性が認められた。ユーモアの類型では、「攻撃性」と「優越性」が七枚ずつであり、「不調和」(四枚)、「意外性」(二枚)の順となった。政権の成立時には「優越性」が多く、崩壊時には「攻撃性」が多いのは、政権の安定を価値基準にしていることがあげられる。三月の内閣改造時にも「攻撃性」がおおいのは、改造の目的が「情実」によるものであったことに對する読み手の反応を想定して描かれていることが考えられる。

最後に小テーマの月別の出現度数をみると、各テーマの背景となる出来事がどの程度「重要な争点」としてメディア側(「政治漫画の」描き手を含めて)が認識したか(メディア・アジェンダ足り得る)を反映している。たとえば、「内閣」においては政権の成立と崩壊のみならず、コメの自由化といった「トピック」が「メディア・アジェンダ」を形成している。また、「政治改革」は衆議院を通過した十一月と参議院でいったん否決され、細川・河野トップ階段を経て可決成立した二月の両方が度数が高くなっている。「政治倫理」においては、中村喜四郎自民党代議士の国会における逮捕が許諾された三月と首相みずからのゼネコンからの一億円借入問題の四月において多いことから、「トピック」性の強い特徴を持つと考えられる。「政党」、「国会」については、一部に有意な差が認められたが全体として五パーセントの有意水準でも帰無仮説を棄却できなかったので比較の対象から除外した。)ユーモア性の「政治漫画」については、「政治」項目の「政治漫画」全体で表れた特徴とほぼ対応した形で表出されている。ただし「政治改革」の項目において八月の度数が「全体」では三番目に多いのに対して、ユーモア性の「政治漫画」では二枚しか表れていない。これは、「政治改革」の内容をまず明らかにすることを描き手が求めたためである。実際には、細川首相の「年内成立と政治責任」の発言にはユーモア性のものがみられたが、選挙制度の改革や政党の公費助成については全くユーモア性の「政治漫画」をみることができなかった。ここにおいて「政治改革」における「政治漫画」では、新政権の「政治改革」の実態の把握(あるいは認知)に「政治漫画」のモチーフが設けられ、「政治改革」を達成させる諸政策への評価(態度)にまで及んでいないことがいえる。

3 記事・社説・「政治漫画」

（表8）は、「政治漫画」六三四枚全部、対応する記事、社説それぞれのイメージをみたものである。これによれば、「政治漫画」は全体としては、「中立」ないし「批判的」立場をとるものとして認知されている（両方で九五パーセントを超える）。全くの「体制批判メディア」とは認知されていない。いいかえれば、「政治漫画」の「解説・評論」の機能と「批判」機能とがともに実証されたといえる。「記事」については、「客観報道」をメディア側が主張する割には八割弱の「中立」性としてのみ認知されている。批判性が二割強現われたのは、対象とする記事の内容に依存するものであろう。つまり、「政治」現象を記事の対象として限定するかぎり二割は「社会の木鐸」としての機能を依然として有しているといえよう。⁽¹⁰⁾「社説」については、テーマや出来事について批判的な姿勢であると認知されるものが半数近くあることがあきらかになった。肯定的な態度表明をもあわせて、九割近くの「社説」がなんらかの態度表明の表出と認知されているのはほぼ常識的な結果と合致する。

（表9）は、「政治漫画」全体と「記事」・「社説」の関係を評定させたものである。ここから明らかなことは、あるテーマに関する「認知」（その情報をみてただちに内容が概略でも理解できる）について、六三一枚中四五パーセントの「政治漫画」を「記事」よりも「認知」的にすぐれていると評定者は判断した。「認知」の概念規定を情報伝達の速さに求めたために、「政治漫画」優位の結果が出たと考えられる。また、ここから先行研究（Ryan & Schwartz, 1956）の知見⁽¹¹⁾を裏付ける結果となった。また、「どちらでもない」が「記事」との比較において四四・三パーセントもあるのは、ワーディングの問題が影響している。すなわち、この評価が内包するものは、①「政治漫画」も「記事」も両方とも読んだ（ながめた）だけではすぐには内容がつかめない、②「政治漫画」と「記事」が相互に補完されたはたらきをもつ（たとえば、前者は情緒面、後者は理性面）ので「どちらでもない」と答えざるを得ない、③「政治漫画」と「記事」

が両方とも同程度の「認知」性を持っている、の三つの傾向が存在する。それゆえ、この三点を区別するような調査手順を設定すべきであった。

次に、「政治漫画」と「社説」との関係についてみると「社説」優位が三〇パーセント弱あった。ここでも「どちらでもない」が六〇パーセント強存在する。これは前述した内包のうちの②に該当するものが③とともににおく含まれていることが考えられる。ただし、「社説」との比較についての評定には(表9)で例証された「社説」Ⅱ「批判性が高い」というイメージを利用して、態度表明について「政治漫画」と「社説」のうちどちらがより明瞭かと問うた。その点を留意すると、「政治漫画」は(表9)でみたように「批判性」をおおく有するメディアであるが、同じ「批判性」を含む態度表明の手段としてのイメージを持つ「社説」と比較すると、それほど態度が明瞭でないことがあきらかになった。いいかえれば、「政治漫画」の持つ「解説」と「評論」の機能はほぼ均等に内在しており、「評論」から「主張」の性格の強い「社説」に対峙すると「評論」性が薄まって「解説」性が顕在するのではないかと考えられる。

これら「政治漫画」と「記事」ないし「社説」との関係、および各々のイメージがユーモア性を持つ「政治漫画」に変数を限定したときにどのように変化をするかをみたのが(表11)および(表12)である。(表11)のイメージの違いについては、「政治漫画」、「記事」、「社説」のいずれの場多にも「中立」カテゴリーの割合が(表9)に比べてわずかながら減少している。必然的にこの影響は「プラス」と「マイナス」の態度表明のカテゴリーの微増を産み出している。(表12)の「記事」「社説」との関連についてもイメージの場合と同様に「どちらでもない」と態度を保留する姿勢がわずかながら減少し、それにつれて、「記事」の評価が微増している。(表9)と(表11)、(表10)と(表12)を組み合わせて「政治漫画」、「記事」(「社説」それぞれについてカイ二乗検定をおこなった。その結果からでは、危険率五パーセントにおいても有意な差を見いだすことができなかった。したがって、ユーモア性の「政治漫画」に限

定して、それに関連する「記事」や「社説」のイメージ・関係は「政治漫画」全体においてみられる傾向と大筋では違いがみられないことが明らかになった。

第四章 結論

本稿の目的は、「政治漫画」の内容分析によって得られた「解説」・「評論」の機能のなかの「評論」（「批判」）性に着手して、ユーモアによって得られる機能を明らかにすることにあつた。その際、「政治漫画」が発したユーモアを読み手がどのように受けとめるのかといった「政治漫画の効果」の面を考慮して逆に内容分析に貢献しようとした。その結果、「政治漫画」におけるユーモア性は、全体の四割を占め、そのユーモア源として「攻撃性」と「優越性」を見いだすことができた。このユーモア性が「政治」をテーマとする「政治漫画」に多く見られた。さらに、イメージとしては「政治批判の道具」とみなされている「政治漫画」は、ユーモアにおける批判とそれ以外の形式による批判との複合であることが明示された。

次に、本研究で見出だされた問題点についていくつか提示しておきたい。

第一に、ユーモア概念枠組みのより精緻な構築である。「笑い」やユーモアの研究の多様性が概念の混乱を生んでいる以上、限定された「笑い」あるいはユーモア研究になるのはやむをえない。しかし、たとえば、「笑い」の源泉としてのユーモアの分類をさまざまな分析の方法（因子分析、クラスター分析など）を用いて新たに構成することも必要である。それによって、「政治漫画」にみられるユーモアの「攻撃性」の内実がより明確になると思われる。

第二には、ユーモアの通文化的比較とメディア間の比較の必要性である。前者は従来のユーモア研究の膨大な蓄積があるが、メディアを通じて表れる価値・信念体系の研究と組み合わせる（「涵養効果研究」、「利用と満足研究」など）ことによって効果研究としての位置付けが可能になるだろう。後者は、新聞漫画だけでなく、雑誌漫画（いわゆるコミ

ック)との比較によって「政治漫画」のユーモア性がはたしてお決まりの「体制批判ユーモア」であるか否かを整理することができる。

第三に、ユーモアの心理学における研究がおもにパースナリティー研究の枠内でおこなわれてきたことを利用して、「政治漫画」に登場する人物のパースナリティーのどの部分が読み手の笑いを誘うのかを考察することができる。つまり、従来の「政治漫画」の「シンボル」の分析にユーモア研究の知見を取り入れることによって、「政治漫画」の内容分析へ効果研究をより深く導入することができるであろう。

註

第一章

- (1) 神島二郎『磁場の政治学』(岩波書店、一九八二年) 八—一二頁。
- (2) 飯坂良明『政治学』(学陽書房、一九七五年) 四—一六頁。
- (3) 政治学、社会学、心理学、精神分析、哲学、人類学、民俗学などでみられる。本稿では「おかしさ」や「おもしろさ」を感じるといふ心的現象とその結果を「笑い」、「笑い」を引き起こす刺激対象を「ユーモア」と定義する。社会学: Anton C. Zijderveld, "The Sociology of Humour and Laughter," *Current Sociology*, 31(1983), pp. 1-103. 心理学: 上野行良「ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について」(『社会心理学研究』第七巻第二号、一一二—一二〇頁)。精神分析: S.フロイト(生松敬造訳)『機知—その無意識との関係—』(フロイト著作集4、人文書院、一九七〇年)。哲学: H・ベルクソン(林達夫訳)『笑い』(岩波文庫、一九三八年)。人類学 Mahadev L. Apte, *Humor and Laughter, an anthropological approach*, Cornell University Press, 1985. 柳田国男『山神とラコゼ』(『定本 柳田国男集 第四巻』筑摩書房、一九六三年、四四—四四二頁)。
- (4) たとえば、菅原健介「4コマ漫画にみる羞恥心の構造」(『日本社会心理学大会一九九二年発表論文集』一二六頁)を参照。
- (5) Leroy M. Carl "Editorial Cartoons fail to reach many readers," *Journalism Quarterly* 45(1968) pp. 533-535. Del Brinkman "Do

editorial cartoons and editorials change opinions, "Journalism Quarterly 45 pp.724-726.

- (6) A. ケストラーは次のように述べている。「戯画は犠牲となる人（物）を何らかの点で我々が知っていれば成り立つ。たといその認知が曖昧であってもイメージさえわかれば漫画（コミック）になりうるのだ。」政治に対するイメージ形成も政治認識の第一歩である。Arther Koestler, *The Act of Creation* (New York: Dell Publications, 1967).
- (7) 佐藤毅の「異化」の概念も自己の確立の手段としてみると重要である。佐藤毅「同化と異化」（江藤文夫、鶴見俊輔、山本明編『講座 コミュニケーション 6 コミュニケーションの典型』研究社、一九七三年、五二―七二頁）。
- (8) 拙稿「政治漫画にみる政治過程 P.K.O 法案における政治漫画の内容分析」（『北陸法学』第一巻第一・二合併号、一九九三年、八三―一二〇頁）。

第二章

- (1) A・シェパードの分類を参考にした。「攻撃性」は敵愾心、脅威、心理的暴力を相手に感じさせるもの、「優越性」は相手の無能力を嗤うもの、「不調和」は矛盾や対立する要素の共存によるもの、「意外性」は予期せぬ突然の事態の勃発をそれぞれ意味する。Alice Sheppard, "Effect of Mode of Representation on Visual Humor," *Psychological Reports*, 52, (1983) pp.299-305.
- (2) 評定者は二名。全体の信頼度は、〇・六四であった。信頼度の測定については次の論文を参照。池内一、岡崎恵子「占領期間における日本新聞の趣向Ⅰ主として分析技術について」（『東京大学新聞研究所紀要』第五号、一九五六年、一〇九―一二八頁）。
- (3) 評定者は二名。信頼度は〇・六八であった。
- (4) 拙稿、前掲参照。
- (5) フェルドマン・オフエル「政治マンガにみる『日本の首相』」（『潮』一九九三年二月号、一二〇―一二七頁）。拙稿「政治漫画にみる政治倫理」（『日本法政学会法政論叢』第三〇巻、一九九四年、三一―四一頁）。
- (6) 拙稿、前掲「政治漫画にみる政治過程」参照。
- (7) Sheppard, op.cit., pp. 300-301.
- (8) ibid., pp. 303-305.

(表1) ユーモア類型の頻度

計	読 売	毎 日	朝 日	
81	28	19	34	攻撃性
72	27	12	33	優越性
56	21	17	18	不調和
46	22	15	9	意外性
255	98	63	94	計

(表3) テーマ別頻度

	経 済	外 交	社 会	労 働	文 化	
計	58	49	5	2	4	総数
595	20	17	2	0	2	
248						

(表6) 政治における小テーマ

46	52	倫政治理
141	69	内閣
48	21	国会
77	27	政党
107	38	改政治
41	5	他その
全体	ユーモア	
政治漫画		

(表 2) ユーモアの類型(得点の平均値)

総 合	読 売	毎 日	朝 日	
255	98	63	94	総 数
3・35	3・0	3・11	3・79	攻 撃 性
3・18	2・93	3・75	3・18	優 越 性
3・09	2・86	3・12	3・33	不 調 和
3・02	2・64	3・47	3・22	意 外 性

(表 4) テーマ別頻度(上位4項目)

計	4	3	2	1	12	11	10	9	8	
413	62	46	22	56	59	54	40	35	59	政 治
188	26	22	5	21	25	27	23	16	23	国 際
64	3	8	7	5	3	9	15	12	2	経 済
19	1	3	2	1	1	3	5	3	0	外 交
58	2	3	21	1	7	3	6	12	6	
20	1	2	6	0	2	0	2	0	1	
49	0	8	16	4	1	1	10	6	3	
17	0	6	3	2	0	0	5	1	0	

(表5)新聞別テ－マ出現頻度

計	読 売	毎 日	朝 日	
413	192	58	183	政 治
188	63	1	74	
64	32	3	29	国 際
19	8	2	9	
58	28	7	23	経 済
20	14	4	2	
49	26	5	18	外 交
17	11	1	5	
584	278	73	253	計
244	96	58	90	

(表7)新聞別小テ－マ出現度数 *その他含む

計	読 売	毎 日	朝 日	
46	16	11	19	倫 理 政 治
25	7	7	11	
141	62	22	57	内 閣
69	26	20	23	
48	25	3	20	国 会
21	7	2	12	
77	42	5	30	政 党
27	12	5	10	
107	39	16	52	改 政 革 治
38	8	16	14	
413	192	58	183	* 計
188	63	51	74	

(表9)政治漫画・記事・社説のイメージ

社 説	記 事	政治漫画	
111	15	27	+
34	463	321	○
140	124	286	-
285	602	634	計

(表10)政治漫画・記事・社説

政治漫画 v s 社	政治漫画 v s 記 事	政治 漫画	
22	284		漫 画 政 治
159	281		D 両 K 方
74	66		社 記 事 説 話
255	631		計

（表 8）月別の小テーマ出現度数

計	4	3	2	1	12	11	10	9	8	内閣 改革 政治
141	33	17	13	2	29	6	14	6	21	内閣
69	15	9	3	1	14	3	10	2	12	改革
107	0	0	2	36	10	30	7	7	15	政治
38	0	0	1	10	4	12	4	5	2	改革
77	19	6	6	8	8	7	3	12	8	政治
27	5	2	1	3	3	3	1	5	6	改革
48	2	7	1	8	5	4	8	3	10	政治
21	1	3	1	5	1	2	5	1	2	改革
46	8	16	0	2	1	6	3	7	3	政治
25	4	8	0	1	1	6	2	3	1	改革
14	0	0	0	0	6	1	5	0	2	政治
5	0	0	0	0	3	0	2	0	0	改革
413	62	46	22	56	59	54	40	35	59	政治
188	25	22	6	20	26	26	24	16	23	改革

（表 11）ユーモアと記事・社説

社説	記事	ユーモア 政治漫画	
45	4	7	+
15	187	117	○
131	57	64	-
124	248	255	計

（表 12）ユーモア政治漫画・
記事・社説

政治漫画 vs 記事	政治漫画 vs 記事	
10	119	政治漫画
66	100	どちらで もない
35	35	記事 社説
121	254	計